

◆その後の動向

一人っ子に対する親の過大な期待、教育パパ、ママの跋扈、それに対応した学校側の進学率一辺倒の教育管理体制が、子供たちに巨大なプレッシャーとなつてのしかかり、子供のノイローゼ・自殺・家庭内暴力へと発展する事例が急増しています。

今年、大いに問題になつたのが夏休みの過ごし方。人民日報も特集を組み、一つの紙面全部を使って日本も含めた各国の子供の夏休みの過ごし方を紹介、中国の子供の過ごし方のいびつさに警鐘を鳴らしました。夏休みになると、父母がセッティングした勉強や習い事のスケジュールがびっしり。学校があるときのほうがよっぽど楽だ、というのです。それに子供たちの安全な遊び場も足りません。全国の体育施設の65.6%が学校に所属していますが、開放されているのは29.2%に過ぎません。そのことが多くの児童をゲームセンターなどに誘い込む一因だ、との指摘もあります。

最近では“差生”(落ちこぼれ)向けの民間学校が大流行。江西省のある民間教育機関が「勉強嫌い、勉強下手、不出来」といった生徒を募集したところ、1年足らずで29の省や市から102名が集まった、とのことで、落ちこぼれの問題の深刻化を示しています。

学校が嫌いになって不登校になる、テストは白紙で出す、などの傾向も顕著になっています。学校にカウンセラーを置くことの必要性が説かれ、制度として動き出してもいますが、北京大学や精華大学でなければ浪人する、といった学歴偏重による浪人の増加が示すように、問題の根は深く、そう簡単に是正できるとも思えません。